

子供どうし

小川未明

青空文庫

学校がっこうから帰かえりの二少しょうねん年ねんが、話はなしながら、あまり人ひとの通とおらない往おうらい来あるを歩あるいてきました。

「清せいちゃん、あのお庭にわに咲さいている赤あかい花はなはなんだか知しっている？」と、一ひとり人が、立たち止どまって垣かきね根あいだの間あからのぞこうとしたのでした。

「孝こうちゃん、花はなじゃない、赤あかい葉は鶏いとう頭とうだよ。」

「ちよつと見みると、花はなみたいだね。」

「孝こうちゃん、この門もんは古ふるいんだね、ここについているのは、呼よび鈴りんだろう。」

「呼よび鈴りんだけど、きつときかないんだよ。」と、孝こうじ二じがいました。

た。

「どうして？　押せば鳴るんだろう。」

「だって、線がついていないじゃないか。」と、孝二が、あたりを見まわしていました。

「押してみようか。」

「もし、人が出てきたら、どうするの。」

「逃げようよ。」

二少年はそんなことをいって、顔を見合って笑いました。

「孝ちゃん、お押しよ。」

「清ちゃん、お押しよ。」

「よし、押してみようか……。」と、清吉が、脊伸びをして、

ボタンに指ゆびをつけようとすると、孝二こうじは、はや逃げ腰ごしになつていました。

「孝こうちゃんずるいや、いつしよに逃にげようよ。」

そういつて、清吉せいきちは、白しろいボタンを推おしたのですけれど、なんのでごたえもありませんでした。

「だれもこないよ。」

「いまに、出でてくるよ。」

「やはり、きかないのだ。」

そんなことをいつていると、玄関げんかんの戸とが開あく音おとがしました。二人ふたりの少しょう年ねんは、足音あしおとのしないように走はしつて、すぐ傍かたわらの畑はたけに生はえているすすきの蔭かげに隠かくれてしまいました。このあたりは、

むかしはたち昔は畑地で、最近町になったのであって、まだところどころに空き地や、畑がありました。もう秋が近づいたので、すすきにはしろはな白い花が咲いていました。

二人は、息をこらしめて、耳であちらのようすをうかがっている、門のところまで来た足音が、しばらくそこに止まっていたが、また引き返していったようでした。二人は、また顔を見合つて、にやりと笑いました。

「もうお家へ入ったね。」

「ごらんよ、あの呼び鈴は、きこえるのだから。」と、清吉が、いいました。

「おもしろいね、もう一度やってみようか。」と、孝二が、いい

ました。

「つかまつたら、たいへんだ。」

「つかまるもんか。」と、孝二は、愉快そうでした。

「もうすこし待っておいでよ。」

二人の少年は、すすきの蔭から、顔を出して往来の方を

ながめていました。同じ組の岡田が、ぞうり袋をぶらさげながら、

帰っていきました。

「孝ちゃん、岡田も呼ぼうか？」

「岡田は、足がおそいから、だめだよ。」

「つかまるといけないね。」

往来に通る人がないのを見とどけて、二人はまた古い門の柱

へ近寄りました。こんどは、孝二がボタンを押したのです。すると、すぐに戸が開いて、だれかこちらへ駆けてくる足音がしました。二人は、おどろいて、一目散に往來をあちらへ走つていききました。二人は、うしろを見ないようにしました。なぜなら、後を追ってくる足音がきこえたからです。

「清ちゃん、追っかけてきたよ。」

「ほんとうかい。」

二人は、息を切らして、往來を走りました。前方に岡田が歩いていきます。岡田のそばを走りすぎるとき、清吉は、自分のかばんを投げ出して、

「岡田くん、たのむよ。」といいました。

かばんを頼まれた岡田は、どうしたんだろうと思つて、振り向くと、女の子が、二人の後を追つてきました。

「あんた、あの子のお友だちなのだ。」と、女の子が、真っ赤な顔をして、聞きました。

「なんだつて、いいじゃないか。」と、岡田は女の子に、答えました。

「あの子、どこの子。」

「そんなこと知るものか。」

女の子は、また二人を追いかけてきました。

「足の早い女だな。」と、岡田は、見送っていました。

「孝ちゃん、また追いかけてきたよ。」

「しつこいやつだね。どこかへ曲まがろうよ。」

二人ふたりは、ぐるぐると横道よこみちをまがつて、紛まぎらそうとしました。

しかし、やはりだめでした。追おいかけてきた女おんなは、すぐうしろへ追せまつていました。

ある大おおきなかしの木きの下したへきたとき、まず清吉せいきちがへこたれてしまいました。

「ああ、苦くるしい。」と、うずくまったのであります。

孝二こうじは、追おいかけてきた女おんなの子こをにらみました。まだ十五歳さいぐらいで髪かみをお下さげにして、短みじい服かを着きていました。

「なあんだ、田舎いなかつぺの女じよちゆう中ちゆうか。」と、孝二こうじは思おもつて、生なま意ま気いきをいったら、なぐろうと考かんがえました。

「おまえたち、あんないたずらをしていいか。」と、女おんなが叫さけびました。

「わるかった。」と、清吉せいきちは、おとなしくあやまりました。

「ほんとうに、もうしないか、おまえもか。」と、女おんなは、こんど孝二こうじにいいました。

「知るもんかい。」

「こんどしたら、ひどいから。おら、田舎いなかの学校がっこうで、徒歩とほき競ようそ走うの選手せんしゅなんだぞ。」と、女おんなの子こはいいました。二人ふたりの少しょう年ねんは、なるほど足あしが速はやいと思おもって、苦にが笑わらいしました。

「おら、どう帰かえったらいいかな。」と、女おんなの子こは、急きゆうにやさしくなつて、聞ききました。

「田舎いなかつぺのくせに、生意氣なまいきだな。」と、孝二こうじが、いいました。

「おいでよ、道みちを教おしえてあげるから。」と、清吉せいきちは、さつきの

往來おうらいまで、女おんなの子こをつれていってやりました。

「おら、奥おくさまにいいつかつて、つかまえたんだから、わるく思おも

わんでくんなせい。」と、女おんなの子こは、頭あたまを下さげて、去さりました。

ふたりふたりの少しょう年ねんは、これこを聞きいて、なんだか涙なみだぐましくなりまし

た。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「赤土へ来る子供たち」文昭社

1940（昭和15）年8月

※表題は底本では、「子供《こども》どうし」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年2月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

子供どうし

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>